

京都大学	博士（文学）	氏名	金 大煥
論文題目	5～6世紀における新羅墳墓の考古学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、5、6世紀代の新羅における墳墓資料の考古学的検討を通して、その歴史的な性格と、新羅の社会構造について究明することを目的としたものである。本論文の構成は、序章、第1部：新羅における高塚の出現と展開（第1～3章）、第2部：新羅高塚の定型性と多様性（第4、5章）、第3部：新羅高塚から見た地域社会の実態（第6、7章）、第4部：新羅高塚体系と初期国家（第8、9章）、終章からなる。</p> <p>まず序章では、これまでの新羅墳墓の考古学的研究の研究史を振り返ることで、その成果と課題について整理した。そのうえで、本論文では新羅中心部における高塚の特性と本質、その定型性と多様性、周辺部地域への着目と中心部との相関性という3つの観点から、新羅墳墓を検討し、新羅社会の構造を解明していく必要性を論じた。</p> <p>第1部（第1～3章）では、新羅高塚の概念を規定し、新羅中心地高塚の特性について議論した。第1章では、新羅高塚をより具体的に定める立場のもと、5世紀前半に高塚がまず王陵に出現すると見た。最古の新羅高塚の候補については、考古学的成果や文献記録から見て、奈勿王陵に比定される119号墳が最も有力であると考えた。新羅中心地で出現した新羅高塚は周辺部へと広がり、各地の有力集団の墳墓として造営される。新羅高塚が中心部と周辺部にそれぞれ出現し、階層化された体系を構成する現象については、これまで「高塚現象」（李熙濬1997）や「高塚社会」（金龍星2002）などと呼ばれてきたが、本論文ではこれを「高塚体系」と呼ぶことを提案した。新羅において高塚体系とは、皇南大塚のような巨大な高塚を頂点とする中心部と周辺部の間の関係性からなる時空間である。このような体系は、新羅式着裝型金工品の分与と合わせて解釈すると、貢納を媒介とした政治的上下関係として理解することができ、文献史学の解釈の枠組みに代入すると、間接支配の関係として理解することができる。新羅高塚の分布や副葬品のレベルの違いからみて、新羅中心部は周辺部よりかなり深化した階層分化を示す。中心の優越性は確かに存在するが、中心と周辺の関係は、理念的な相互作用により結びついたネットワークに留まっていた可能性が高い。</p> <p>第2章では地上式積石木槨墓を対象に、新羅高塚の特性について考察した。その結果、地上式木槨は複雑になった納棺・埋納儀礼のための空間が拡大されたものであり、地上式積石部のうち側壁部の積石はそのような儀礼を行うための場と見た。結局のところ、地上式積石木槨墓の特性については、墳墓の地上化と高塚化も重要であるが、葬送儀礼の観点からは木槨内部で行われた複雑な納棺・埋納儀礼を強調し、それを積石部という特殊な場所によって誇示することにより、これこそが新羅高塚の本質</p>			

であると考えた。また、これと関連して新羅中心地における高塚には墳丘の大きさだけでなく、非常に多様な戦略が共存していることも非常に興味深い。新羅中心地の高塚における差別化の重要な要素としては、墳丘規模にくわえて、埋葬施設の大きさ、着装型金工品の水準、地上式積石木槨墓かどうかがこれまで主に指摘されてきた。皇南大塚南墳のようにすべての基準を満たすものがある一方で、天馬塚のように埋葬施設の大きさと着装型金工品の水準、地上式積石木槨墓という基準は満たしているが、墳丘規模はそれに及ばない事例もある。また、44号墳は地上式積石木槨墓であるが、着装型金工品の水準は低いのに対し、金鈴塚や飾履塚は王陵の陪塚であり、最高レベルの着装型金工品をもつが、墳丘の大きさは比較的小さく、地上式積石木槨墓でもない。これらからみて、当時の新羅中心勢力内の差別化戦略が非常に多様であったことが分かる。個別の事象が具体的に何を意味するのかは定かでないが、当時の中心勢力内部において、分化が非常に進行していたという研究成果に基づけば、このような差別化は深化した階層分化を固定し、可視化するための戦略として理解できるのではないだろうか。また、そのような差別化の戦略や方式を統合するかたちで麻立干期の王陵が出現することも重要な意味を持つ。

第3章では、瑞鳳塚の再発掘で確認された護石儀礼遺構と床石にもとづいて、麻立干期の墳墓祭祀の実態について議論した。瑞鳳塚の護石周辺で確認された大壺の内部には飲食物貢献儀礼の痕跡とみられる動物遺体が入っていた。大壺の底に敷かれた砂利層の層位からみて、儀礼は北墳では1回、南墳では2回以上行われたと推定される。これと関連して南墳の周囲からは床石も発見されており、これまで7世紀中頃を上限とみてきた新羅墳墓の床石は、麻立干期にまで遡及することとなった。護石周辺でみられた儀礼の痕跡や床石の存在は、瑞鳳塚において定期的な墳墓祭祀が施行されたことを意味する。最近の金鈴塚の再発掘や44号墳をはじめとするチョクセム地区の調査成果から見て、麻立干期は墳墓祭祀が盛行したと考えられる。この時期は王位継承が金氏に世襲される時期であり、麻立干は世襲の正当性を始祖よりも、墳墓祭祀を通じた先代麻立干の正統性に求めていたためであろう。麻立干期に王陵をはじめとする新羅中心地に見られる大きな変化は、納棺・埋納儀礼および墳墓祭祀の強調であり、これが高塚出現のきっかけとなった。新羅中心地における高塚はまさにこのような儀礼を体現するものであり、新羅中心勢力は高塚という媒介物によって権力の正当性を確保していたものと考えられる。新羅高塚は麻立干と彼の追従者たちが自らの正統性を誇示し、権力の正当性を維持するために考案した戦略であり、これこそ新羅高塚の本質であった。

このような特性からみて、新羅高塚は記念物としての性格が非常に強調された墳墓といえる。葬送儀礼のために巨大な舞台を築造し、そこで行われる納棺・埋納儀礼を強調する点、墳墓の築造後も墳墓祭祀を長期間定期的に行う点、墳丘の連接などを通

じて系譜を誇示する点などは、新羅高塚の記念物的特性をよくあらわしている。族譜のような文字化された血縁関係記録がなかったであろう当時において、墓地はその機能を代替するものであり、新羅高塚は血縁や地縁といった社会における序列や位階化を示しながら、自分の系譜を合理化する物質的な表象であったはずである。そのような点において、新羅高塚は何よりも記念物的特性を強調した墳墓といえることができる。新羅中心部の大型墳丘を持つ巨大な高塚は、麻立干の記念物といっても過言でない。

第2部（第4、5章）では、新羅高塚の定型性を示す重要な指標としてのみ把握されてきた副葬土器と埋葬施設を検討対象として、その実態の多様性、地域性を浮き彫りにし、その歴史的背景についても言及した。

第4章では、新羅中心部から周辺部へ広がる代表的な定型の一つである新羅様式土器について検討を行った。これまで新羅様式土器の拡散については、政治的拡張の結果と理解する立場が優勢であったが、本章では新羅様式土器の拡散について、土器祭祀法のように墳墓へ副葬する規則が広がり、それが受容されたことを示す現象と理解した。もちろん各地において新羅様式土器を受け入れるということ自体が、新羅との緊密な関係を示しているが、あくまで理念的な相互作用の結果とみられる。

第5章では新羅高塚の埋葬施設の検討を行った。改めてその構造を詳細に検討すると、高塚群ごとに非常に個性を把握でき、その個性が地域性として整理できることを指摘した。埋葬施設の地域性は、高塚にみられる他の定型性とは異なり、一義的に多様性の一つとして理解される。地域性発現の背景については様々な状況が考えられるが、何より重要なのは中心部と周辺部の交流だけでなく、地域と地域間の交流によって発現する地域性があるということである。例えば、大邱地域と星州地域との間の埋葬施設の交流は、新羅中心を経ることなく地域間の交流が行われた結果である。さらに、大加倭との交流の結果と推定される大邱地域の埋葬施設の主副櫛配置についても、大邱地域独自の交流の結果と考えられる。これらの地域間交流は、従来の新羅高塚論では等閑視されてきたもので、地域の主体性を示す重要な現象として評価できる。

地域間の交流が、新羅中心部とは関係なく、非常に活発に行われていたことは、第4章でみた長頸壺副葬定型においても確認されている。地域の主体的な様態を示すこれらの地域性は、当時の地域が対外交渉権を喪失していたとみる間接支配論の論点には反するものである。高塚の多様性は、周辺部の地域を新羅の間接支配下にあった政治体として理解する方法の限界を示している。

第3部（第6、7章）では、墳墓資料が体系的によく蓄積されている釜山地域と慶山地域を対象に、新羅化の過程について議論した。釜山地域はかつて金官加耶の一つの軸と解釈されていたが、第6章における検討の結果、独自の政治体であり、新羅とも緊密

な関係を持っていたことが推定された。とりわけ釜山福泉洞古墳群集団は、対倭交渉をはじめとする交流の窓口的役割を果たしたと見られるが、釜山蓮山洞高塚群から見て、その機能は長く維持されつづけたようである。蓮山洞高塚群から出土する倭系甲冑のレベルから見て、対倭交渉は依然として釜山地域を通じて行われていた可能性が高い。釜山地域は新羅の影響力下に入った後も、交渉の独自性や主体性を維持しつづけたと考えられる。

次の第7章では、慶山地域の新羅化について議論した。慶山地域もいち早く新羅の影響を受けてきた地域である。これまでは新羅の影響に対して、地域勢力は一方向的に受け入れるだけであったかのように描かれてきたが、本章では在地勢力が主体的に新羅の物質文化を受け入れることで自らの正統性を操作し、創造してきたと考えた。両地域だけでなく周辺部各地の新羅化については、これまでよりも能動的な姿を描き出すことが可能である。

第4部（第8章、9章）では、新羅高塚体系の歴史的 성격について議論した。新羅中心部と周辺部において高塚が築造される現象を「高塚体系」と定義し、第8章において、その歴史的な性格を次のように理解した。

第一に、高塚から見て、新羅中心部では非常に多様な差別化戦略が現れている。第2章で議論したように、墳丘の規模、着装型金工品の水準、地上式積石木槨墓かどうかなど、墳墓による差別化の様相が非常に多岐にわたっている点は、新羅中心部ならではの特徴である。これは当時の新羅中心勢力の差別化戦略を示すもので、階層化の水準が単純ではなく、非常に複雑であったことを物語っている。当該期の新羅中心部の複合度は非常に高かったと考えられ、これこそが新羅高塚体系における中心部の特質といえる。

第二は、新羅高塚体系には定型性と多様性の共存現象がみられることである。新羅式着装型金工品と新羅様式土器は定型性を持って周辺部に広がるが、その全てを政治的な拡散と結び付けることはできない。新羅様式土器の拡散は、長頸壺副葬の場合のように、ある規則が受容されることによって現れた現象であり、着装型金工品の共有は、新羅中心勢力と周辺勢力の間の貢納を媒介とした何がしかの関係性を体現している。それぞれ異なるレベルで扱うべき課題であり、これらを一つの定型性とみなして間接支配の結果とみる解釈は、考古資料の多様な意味を見落としている。多様性は新羅高塚の受容過程において表出した現象である。新羅高塚の本質については、第1部で議論したように多様な意味を含んでいるが、地域がその一部だけを受容し、既存の伝統を維持することによって現れた多様性は、地域の主体性を考える上で重要な現象である。また、多様性は地域間交流の産物と判断され、地域が対外交渉を主体的に行っていたことを意味する。高塚体系における交流は、中心と周辺だけでなく、周辺部の地域間にも存在したことを認める必要がある。対外交渉権を認めない間接支配の概念

と、高塚体系にみられる現象は相反しており、高塚現象を間接支配の結果としてしか理解しない観点には問題がある。また間接支配の概念については、様相があまりにも多様で幅広いという問題もある。新羅高塚体系については、定型性だけでなく、多様性の観点から、よりダイナミックに評価する必要がある。

第三は、新羅高塚体系内における地域の存在様態である。新羅の地域は、これまで新羅の支配力拡大に伴って、受動的に適応する存在として描かれてきた。しかし、当時の各地は本論文で議論した内容に基づけば、新羅の拡張に非常に能動的に対応していたと考えられる。であるならば、麻立干期の地域史はこれまでよりももう少し具体的に議論ができそうである。これまで描かれてきた麻立干期の地域については、文献記録の限界からどの地域も似たような過程で新羅化されたかのように描写されてきたが、考古資料に基づいて地域の主体的な面を強調すれば、それぞれ非常に独特な地域史を復元することが可能である。例えば、昌寧地域のような土器や墓制が非常に多様な特性を有する場所について、他の地域と類似した観点で新羅化を議論することは、考古資料のダイナミズムを無視したアプローチである。昌寧だけにみられる考古資料から彼らの主体性を強調し、彼ら独自の新羅化への対応と戦略について議論する時が来たといえよう。もちろんだからといって遅くまで昌寧の新羅化を認めようとしない研究にも問題はある。これまでに出土した考古資料から見て、昌寧と新羅が深い関係にあったことは確かである。時期ごとにその関係性がどのように変化し、その変化に対して昌寧の地域勢力がどのように主体的に動き、新羅中心勢力がそれに対してどのように対応してきたかを描写することこそが、地域史の復元において有意義な観点であると考えられる。

第四は、以上の議論を踏まえて新羅高塚体系の歴史的な性格をどのように見るか、ということである。これについては、第9章で検討した。現時点では初期国家として理解するのが最も妥当であると考えられる。東アジアにおいて、中国を中心とする二次国家である初期国家群は、それぞれ普遍性と特殊性をもっている。そのような歴史性の中で当時の新羅を理解しようとするならば、初期国家という概念で捉えるのが最も客観的ではないかと考える。その理由は、高塚体系が示す当該期の新羅の姿が、初期国家の特性と非常に似通っているからである。本論文では新羅高塚体系の歴史的意義を初期国家という概念で理解しようと試みた。

最後に終章において、本論文の概要を提示し、今後の課題をまとめた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の著者は、大韓民国・嶺南大学校博物館で行われた慶山・林堂洞古墳群の発掘調査および出土遺物の整理作業に長らく従事した後、京都大学大学院文学研究科に留学して、朝鮮古蹟調査事業として行われた慶州墳墓の調査研究成果や、日本考古学における墳墓研究を学んだ。帰国後は、大韓民国国立博物館に勤務しながら、植民地時代に日本人研究者により調査が行われた金冠塚・瑞鳳塚・金鈴塚の再発掘に参加し、多くの新たな事実を明らかにしてきた。このように、5～6世紀を中心とする新羅墳墓研究の最前線に立ち続けてきた著者が、この間の研究成果をまとめたのが本論文である。

著者は、これまでの学史を踏まえた上で、墓域・大型墳丘・着装型金工品・新羅様式土器といった要素を備え、5世紀から6世紀前半にかけて慶州で築造された最高位階大型墓、およびその影響を受けた墳墓を「新羅高塚」と定義する。新羅高塚は、慶州を中心とする洛東江以東地域、さらには洛東江上流域や江原道の一部で築造された。このような慶州を中心とした墳墓築造システムを、筆者は「新羅高塚体系」と名付けた(第1章)。本論文では、さまざまな考古資料を通して、本体系の特質を分析し、その歴史的位置づけを試みている。

新羅高塚体系の中心地である慶州における新羅高塚の実態を検討したのが、第一部である。著者は、金冠塚・瑞鳳塚の再調査成果を元に、地上式積石木槨墓の木槨の新たな復元案を提示した。そして、被葬者の納棺・埋納儀礼を強調・誇示するために木槨構造が複雑化し、葬送儀礼の場として側壁部積石が出現したと考えた(第2章)。また、瑞鳳塚の墳丘護石に接して据え置かれた複数の大甕と、その内部に納められた小型土器などの分析を通して、墳墓の築造後も、その周辺で飲食物供献儀礼を含む祭祀が繰り返し行われたことを明らかにした(第3章)。こうした研究成果は、新羅高塚が、積石木槨の築造と被葬者の納棺・埋納から大型墳丘の構築、そして墳丘周辺での祭祀に至るまでの長期間にわたって、被葬者とその地位の継承者の社会的地位を視覚化した、一種のモニュメントの機能を有したことを、考古資料に即して具体的に明らかにした点で評価される。

次に著者は、新羅様式土器(第4章)と埋葬施設(第5章)をとりあげて、慶州とその周辺地域における墓制の定型性と多様性の様相を分析した。新羅様式土器の拡散は、これまで新羅中心勢力の領域拡大と関連付けられてきた。一方、埋葬施設の多様性は、新羅中央勢力に対する各地域集団の独自性を強調する証拠とされてきた。著者は、こうした文化要素が慶州地域から拡散したことを認めると共に、それらがそのまま受容されずに変形して地域性を帯び、さらにいくつかの地域的要素が、その周辺地域に二次的に拡散していったことを明らかにした。そしてこうした検討成果にもとづいて、新羅高塚体系には、定型性と多様性が共存していたことを示した点は、注目に

値する成果である。

このような、慶州と周辺地域との関係の実態は、新羅と金官加耶のどちらの影響下にあったのかについて多くの議論が交わされてきた釜山地域（第6章）と、早い段階で新羅化されたと考えられてきた慶山地域（第7章）における、新羅的要素と地域的要素の変遷を整理することを通して、さらに明確にされた。

以上の検討を通して明らかにされた新羅高塚体系の特質を、著者は定型性と多様性が共存する二重構造であると要約する（第8章）。そして、大韓民国における国家形成論の研究傾向と問題点を指摘した上で、近年の欧米や日本で議論されてきた国家形成論を参照し、高塚体系に象徴される5～6世紀の新羅を、初期国家段階にあたると結論づけた（第9章）。

5～6世紀における新羅墳墓の調査研究は、1921年の金冠塚の発見を契機として、日本人研究者により調査研究が独占的に進められた。1945年以降には、大韓民国の研究者によって、慶州のみならず周辺地域における墳墓の調査が盛んに行われ、多様な出土遺物の個別研究も進んだ。しかし、そうした研究成果の総合的な歴史的解釈については、どのような文献をどのように利用するのかにより、少なからずの相違が存在しているのが実情である。それに対して本研究は、新しい発掘調査成果を積極的に利用すると共に、日本考古学における研究成果や、欧米考古学での理論考古学の動向も参照することで、考古学的方法によって、新羅の国家形成過程を論じた点に大きな意義が認められる。本論文における研究成果は、今後の新羅考古学研究の発展に少なからず寄与するであろう。

なお、口頭試問において、英語の専門用語に対する日韓での訳語の違いや、大韓民国における墳墓の年代決定方法についての説明の不足が指摘された。ただ、こうした点は、日本と韓国における考古学研究の伝統の違いから生じた点である。むしろこうした問題の解決を通して、日本と韓国間の研究成果の共有がさらに進むことを願う次第である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2022年1月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。